

さいほうとうしゅう

# 西鵬東鷺 — 洪庵と泰然

海堂 尊

## 第十三回

### 17章

虎狼痢、猖獗

安政五年（一八五八）

初めて日本がコレラに襲われたのは文政五年（一八二二）、洪庵が十三歳の秋のことだ。

その年の二月、オランダ商館長ブロンホフが江戸参府した際、大槻玄沢ら数名の蘭学者に、「コレラ・モルビュス」という新しい病気がジャワで流行し、多数の死者が出ていることを伝えた。そしてバタビア政庁が発行した冊子を渡した。

それを宇田川榕菴が翻訳し、「コレラモルビュス説」と題し、他の医家に知らせた。そこには「東方諸国に多かつた病気だが老若男女を問わず、何の前触れもなく発病する。病気の性質は甚だ危険で、数時間で死ぬこともある」とあった。

半年後の八月、長州で一カ月余りで三千人近い死者を出した後、近畿でも流行したという。

この時のコレラの伝染経路は、朝鮮から対馬を渡り、下関に到達したものと考えられた。

当時二十五歳の桂川甫賢は、バタビア政庁発行の冊子を翻訳し「酷烈辣考」として十二月に出版している。そして二度目が、その三十六年後、安政五年（一八五八）夏から秋にかけての大流行となったのである。

安政五年七月。

長崎では、ポンペを教官とした医学伝習所が稼働して半年が経った。

ポンペは系統立てた講義をしたが、その内容は新奇かつ高度で、オランダ語での講義についていける者はほとんどいなかった。ただひとり、松本良順の付き人として参加した島倉伊之助だけが、ポンペのオランダ語の講義内容を漢文に訳し、すらすらと書き取っていた。

このため、ポンペの講義を伊之助がノートに筆写し、それを改めて良順が教授する、という形式に落ち着いていく。

父・泰然と違い、良順は几帳面なところがあつた。特に決められた規則には、従順だった。

正業が、城内に参内する奥医師であるせいかもしれない。そうし

たところが泰然をして、佐藤家は代々小粒になっていく、と嘆かせ  
る一因いちいんでもあった。

けれどもそうした姿勢は、新しい制度を作る時にはプラスに働く  
面もある。

非公式な組織だった長崎医学伝習所が、順調けつこうに結構を整えていっ  
たのは、良順の力による所が大きかった。

一方で色里いろざとに足繁あししげく出入りしながら女色じょしよくには溺れない、という点  
は泰然とそっくりだった。

良順は丸山遊郭ゆうかくの「引田屋ひけたや」を鼻眞ひいきにしていた。

そこは父・泰然もかつて根城ねじょうにしていた茶屋だが、そのことを良  
順は知らない。

そんな良順が体調の異変を感じたのは、七月中旬のある日の昼下  
がりのことである。

昨日から吐き気がしていたが、腹が緩くなり、下痢げりが始まったの  
だ。

——昨晚、引田屋で食べた刺身が当たったかな。

吐き気をこらえながら、ぼんやり考える。心当たりはそれくらい  
しかなかった。

同時に嫌な予感に襲われた。

前日、市内に下痢おうと・嘔吐おうとの患者三十名が発生したという届け出が

長崎奉行にあつたという。

更に、沖に停泊中の米国軍艦ミシシッピー号の乗組員が、同様の胃腸病に多数罹患しているという話も伝わってきた。

——コレラかもしれない。

そう思った瞬間、ひどい寒気に襲われ、全身が瘡に掛かったように震え出した。

もはや、コレラで間違いなかった。

だが良順は強運だった。彼を診たのは、日本で一番の医学知識を持つポンペだった。

彼は、バタビアや清国でコレラが流行しているという情報をいち早く掴んでいた。

なので持参した医学書で事前に調べていて、迅速に対応できたのである。

良順を真性コレラと診断したポンペは即座に、湯の全身浴後に、キニーネを服用させ吐き気を抑える治療を開始した。

一命をとりとめた良順は、直ちにポンペの「コレラ・メモ」を訳した。硫酸キニーネとアヘンを与え、温浴させることが基本だ。ただし後世の検討ではキニーネとアヘンの併用療法は、コレラには実効性がない、ということがわかっている。

だが治療法が皆目わからず、手探り状態だった当時においては、

ポンペの処方は暗夜の一灯となり、「ポンペ口授」として広がっていった。

ポンペは感染者の直接診療を、奉行所に申し出た。シーボルト事件以後、オランダ人医師による直接の医療行為は行なわれていなかった。

そのため奉行所は難色を示したが、良順が粘り強く交渉するとようやく、良順や目付が同席するという条件で、診療許可が下りた。これがきっかけで、小島養生所の創設につながるのである。

この時、人口六万人の長崎で、ポンペの治療を受けたコレラ患者は千五百人余に達し、その半数が助かったという。

七月に入ると、なぜか大坂より一足早く江戸に飛び火した。その流行は八月半ばにピークに達し、九月下旬には終息した。百万都市・江戸のコレラの死者は四万人前後と推定された。

江戸で流行した一カ月後の八月中旬、大坂でコレラが流行し始めた。

その直前の七月、足守藩主のお世継ぎが大病を患い、洪庵は足守藩に召された。

今回の足守訪問は洪庵にとって故郷に錦を飾る凱旋になり、大勢の供を引き連れて帰郷した。

塾生二人、道中と足守滞在中は若党、長刀持、薬籠持、挟箱持、草履取を各一名、駕籠舁き四人。他に薬箆の運搬、門人用の駕籠舁きなど人足七人も雇い、総勢十九名の仰々しい行列に仕立て上げた。それには三つの意味があった。

ひとつめは浪速の適塾の威光を示すこと。ふたつめは故郷の母を喜ばせること。そして三つめは、適塾生に現在の塾の勢威を示すためである。

八月四日、静かな故郷の足守から、蝉時雨が降るような浪速に戻った洪庵は、無理が祟ったのか、高熱を発して寝込み、一時は人事不省となった。

夜、意識が回復した洪庵は、自らを「劇性間歇熱」と診断し、キニーネを服用した。マラリアと診立てたわけだが、一足早くコレラに罹患していた可能性もある。

そこにコレラの大流行が、浪速の民草を襲った。漢方医は暑気あたりと考え、「霍乱」と診断した。この時代、感染症の概念はなかった。

だが洪庵は、凄まじい症状を見てコレラと診断し、「虎狼痢」という字を当てた。そして、病み上がりの身を押し、獅子奮迅の対応をした。

大坂の病死者は八月中旬から九月中旬までの一カ月足らずで一万

人を超えた。

コレラ患者の往診のため、洪庵の駕籠が浪速の街を走り回る。けれども、洪庵の対応にも限界がある。

なにしろ診断法も治療法も、確立されていないのだ。

「身体を温め、粥かゆを飲ませ、下痢をした者は隔離せよ」という洪庵の指示は、下痢をした者と接触すると発症につながるという、経験則に基づいたものだった。

洪庵は適塾生には対応させなかった。もし適塾でコレラが発生したら、密集空間ゆえに目も当てられない惨状さんじょうになることは、火を見るより明らかだった。

民草は神仏頼みで、祇園ぎおんでは千度詣せんどもうでが流行り、京では秘仏ひぶつ以外はみな御開帳ごかいちようした。

一日二百人を超える死者で茶毘所だびしよは一杯になり、棺ひつぎの中で死者が蘇生そせいするという騒動も起きた。死体を山積みにして、一気に焼こうとしたために、梅田うめだと千日せんいちの茶毘所は火災で全焼した。

コレラへの対応で混乱する中、医師は確かな指針を渴望かつぼうしていた。洪庵は、昼間は患者の治療に当たり、夜間は複数の蘭医書からコレラの治療法を抜き出してまとめた。八月十七日から二十二日まで五日間は不眠不休で、カンスタットの「治療書」、コンラジの「病

「理各論」、モストの「医家韻府」という三人のドイツ人医師のコレラ治療法を抜粋し、小冊子を書き上げた。

洪庵の代表作のひとつ、「虎狼痢治準」である。

洪庵はその冊子を「百部絶板、不許売買」の条件で、各地の医師に配布した。

そこで「虎狼痢」を「印度霍乱」と定義したのは、圧倒的多数を占める漢方医との融和を図ろうとした妥協案だった。

その書の冒頭に置いた題言の長嘆息が、当時の洪庵の心情を余すことなく伝えている。

「文政五年のコレラ流行時に適切な方法を立て、治療した者があつたという事案は耳にしない。三十六年経つた今も状況は変わらず、方針も計画もなく、ただ焦るばかりである」

治療は手探りだった。

洪庵は桂枝（シナモン）の粉末を主成分にした「芳香散」と、腹部を温める「芥子泥」の湿布を推奨した。初期患者には麦や米の煮汁、粥汁を与えたがこれは後年、急性期コレラの主な死因が脱水症状と判明し、基本治療は経口輸液としたのと整合する。

その頃、長崎から「ポンペ口授」が各地に出回り始めた。

当時のポンペの威光は絶大で、下痢止めにキニーネを使うとしたため、医師はこれに頼った。



そのためキニーネの値が高騰し、大坂の薬屋から払底してしまう。  
そうした惨状を嘆いた洪庵は、「ポンペ口授」に疑問を持ち、「虎  
狼痢治準」で糾弾した。

それは洪庵にしては珍しく、感情的にも思える他者攻撃となった。  
「町ではキニーネが不足し、価格も暴騰している。医師はキニーネ  
がないと手をこまねいているだけ、庶民は高値で買えず死を待つ  
のみ。ポンペが示したのはキニーネとアヘンの混合薬で、古くからあ  
る治療法である。『初期、歇冷期、抗抵期』という病の三期に応じた  
処置を論ぜず、お粗末である」という批判の論調は手厳しい。

相手を徹底的に否定する態度は違和感がある。キニーネの暴騰を  
招いた「ポンペ口授」を否定したいあまり、過激な言説に走ってし  
まったのかもしれない。

だが洪庵の「虎狼痢治準」も、医学的な評価は低かった。  
弟子の箕作 秋坪でさえ、「三つの療法を羅列し、勘案し工夫する  
よう促しているだけで、急ごしらえで疎漏すぎ、師の名を汚しかね  
ない」と手厳しく批判している。

だが蘭学の第一人者である洪庵がそんな蛮勇を振るったところに、  
物静かな彼の中に脈々と流れている、強靱な意志が見てとれた。

洪庵は頑迷な学者ではなく、柔軟な臨床家だったのである。

その最中、長崎の松本良順から手紙が届いた。彼は激烈な筆致で、

洪庵に抗議していた。

「洪庵先生のポンペ誹謗は甚だしい。キニーネの使用はポンペの独断的な意見ではない。問題があるとすれば、自分の翻訳が下手だったのである」

そのクレームと共に、ポンペが根拠にした蘭書の写しが送られてきた。

洪庵は愕然とした。良順の翻訳はポンペの意図を正確に伝えていなかったのだ。

ポンペは成書を参考に、適正に処方していた。だから洪庵の批判は的外れだった。

洪庵は直ちに良順の抗議文を添えてポンペの治療法を追加印刷し、「虎狼痢治準」の巻末に綴じ込んだ。その文章で洪庵は「当時は大急ぎで、知らず識らず人を辱めてしまった」と明確に自分の誤りを認め、潔く謝罪している。

その書状を洪庵に届けた石井謙道（信義）は、そんな洪庵の姿勢に深く感銘した。そして適塾で修学させてほしい、と申し出た。

「今、私は長崎で松本先生にお世話になっていますが、冷遇されているのです。ポンペ先生の授業を直接伺うこともできず、父の知己の蘭医に紹介され、そこで修学しています。このまま長崎にいても蘭医学を会得できそうにありません。どうか適塾に入塾させてくだ

やう」

石井謙道の訴えを聞いた洪庵は、腕組みをして、しばし考え込んだ。

彼の修學歷は、輝かしいものだった。

彼の父は、鳴滝塾出身の岡山の蘭学医で、嘉永五年（一八五二）に徳川家の侍医に召され上府している石井宗謙である。当時、十三歳だった石井謙道は父に従い江戸に登り、箕作阮甫の門下生になり、桂川甫周のオランダ語辞典の編纂にも関わった英才である。

だが長崎での冷遇ぶりはあまりに理不尽に見えた。しかしそれは、それ相応の理由があるように、洪庵には思われた。それは彼の父・宗謙が、シーボルトの娘のイネに対して行なった不実が尾を引いているのではないか、ということだ。

二宮敬作から紹介されたイネに産科の手ほどきをした宗謙は、イネを孕ませてしまった。師の娘に手を付けるなど、門下生としては許されないことだ。

そのことはかつて村田蔵六からも聞かされていた。にわかには信じ難いが、美貌のイネが、さいづち頭の蔵六を慕っているという噂があった。蔵六が宇和島藩に出仕した時、二宮敬作がイネを宇和島に呼び、蔵六に蘭医学を教示させたことがあり、二人は師弟関係にあった。

後に思えば、その話をした時の蔵六の様子は普段とは違い、やや冷静れいせいを欠いていたようにも見えた。おそらく蔵六も、イネを憎にくからず思っていたに違いない。イネという女性は、男性の外見に囚われず、内面を見抜くことができる賢明けんめいな女性なのだろう、と洪庵は推察すいさつした。

そのイネは今、ポンペの元で修学し、女人ながら人体解剖の助手も務めているという。

シーボルトは、ポンペにとつて尊敬すべき先達せんだつである。ポンペが彼の娘のイネを丁重ていじゆうに扱っていることは間違いないだろう。

ならば石井謙道が、長崎の医学伝習所で冷遇されてしまうのも、やむを得ないのかもしれない。だが洪庵は、謙道にそのことは言わなかった。

それは謙道の罪ではない。

哀れに思った洪庵は、謙道の入塾を受け入れた。もともと江戸で英才教育を受けた謙道は、めきめきと力を伸ばした。

そして塾頭の福沢諭吉ゆきちが賛嘆さんたんするほどの実力を発揮するようになる。

石井謙道は後に江戸に戻るが、江戸の医学所の頭取とうどりに任命された洪庵は彼を教授に任命する。

洪庵が培つちかった医の精神は、卒業生に引き継がれ、全国の津々浦々つつうらうら

に広がっていった。

\*

当時のコレラに対する対応は混乱を極めた。

その渦中かちゅうで洪庵が、声望せいぼうを失う怖れおそもあつたにもかかわらず、拙速せつそくと思われるコレラ対策の書を緊急出版し、権威者のポンペを正面切って批判するという、およそ普段の彼らしからぬ行動に出たのは、周囲から見ると不思議に思われた。

だがそのことは、彼の勇氣と良心を示す、燦然さんぜんと輝く金字塔きんじとうである。

因ちなみに洪庵の処方はキニーネよりもアヘンを好んだ。

アヘンは鎮痛、鎮静けいれん、痙攣止め、嘔吐・下痢症状の緩和など、コレラの主症状に有効だったからだ。現在、キニーネはコレラ治療には全く無効であることが判明している。

その意味で、「ポンペ口授」を批判した洪庵は、医学的に正しかったわけだ。

なおこのコレラ流行を機に、近代式病院の必要性を説いていたポンペは、松本良順の協力の下で「養生所」を設立し、「医学所」も併設している。

それは、長崎奉行の全面的な支援を受け、高島秋帆しゅうはんの屋敷の跡地で、長崎の街を見下ろす、小島地区の高台に設置された。

やがて長崎の人々は、無料で診察してもらえる医学所に足繁あししげく通うようになった。

こうして地域医療と医学教育が融合した、新しい医学教育の中心地が、長崎の地で産声を上げた。それはシーボルトの鳴滝塾なうたきじゆを彷彿ほうふつとさせた。

その高台で時々、薄物うすものの十徳じつとくを着た、禿頭とくとうの青年がぼんやりと海の向こうを眺めている姿が認められた。

やがて、そこは「長崎精得館せいとくかん」に名称を変え、ユトレヒト軍医学校出身の二代目医学所頭取とうととなるボードウィン、三代目のマンズフエルトと、日本の西洋医学の黎明期れいめいきを支える俊英しゆんえいが次々に就任した。その頃には、初代世話役の松本良順は江戸に呼び戻され、彼に代わり適塾の塾頭を務めた俊英・長与専齋ながよせんさいが運営えんぎを担になっていくことになる。

秋風が吹く中、ようやくコレラの流行が収まり、落ち着きを取り戻した江戸に激震が走った。

安政五年九月七日、京都で攘夷活動家の梅田雲浜が逮捕され、九月十七日には反幕の公卿の首魁と目された三条家の家士・飯泉喜内が江戸で逮捕されたのだ。その唐突に見えた大捕り物が、全ての始まりだった。以後、安政六年（一八五九）始めまで、公卿関係の反幕運動の家士だけで三十余名が逮捕されるまで、延々と続いた。

世に言う「安政の大獄」である。

十月二十三日、橋本左内は江戸町奉行に召喚され、藩邸内の曹舎での謹慎を命じられた。その第一報は、懇意にしていた大坂の与力から、洪庵の元に届けられた。

「大老の井伊さまは、水戸斉昭侯の不時登城に乗じて、三卿の隠居慎みをされてから、やたら意気盛んでしてな。水戸に戊午の勅諭が下りたのを根に持ち、今回の大粛清に走っている、との噂です。左内殿がお咎めを受けるのは、やむを得ないかもしれませんが」

戊午の勅諭とは、徳川幕府にとって屋台骨を揺るがしかねない、とうてい容認できないものであった。

幕府は朝廷からお許しを得て日本を統治する形を取っている。これは日本独特の仕組みで、これまでの鎌倉幕府、室町幕府も全てその形式に則っている。

徳川幕府は朝廷の委任を独占し、取って代わる大名の出現を抑えるため、大名が朝廷と直接交渉するのを禁じた。だが現実には、京に出入りする大名や使者はいた。それは、徳川幕府が弱体化したことの現れでもある。左内が行なった京都手入れは、まさに禁令であったわけだ。

洪庵は怒りを抑えきれず、低い声で言う。

「なんとご無体な。そもそもは井伊殿が、米国との間の条約締結の際、朝廷を蔑ろにしたことで、帝がお怒りになられ、水戸に勅諭を下したと云うではないか。元はと言えば、ご自分の不始末。それを逆恨みしてかような仕打ちとは、あまりにも横暴すぎる」

与力は左右を見回し、人差し指を唇に当てて、声を潜める。

「洪庵先生、壁に耳あり、です。ここは天領・大坂の奉行所、幕府の直轄地です。お気持ちはわかりますが、どうかお控えください」「すまぬ。左内が囚われたと聞いて、つい……」

「お気持ちはようわかります。でも左内殿は所詮は使い走りの若輩者。お咎めは避けられぬにしても、重罪はないでしょう」

うなずきながらも洪庵の胸に、かすかな不安が湧いてくる。



——あの子は、まっすぐすぎる。それは俗物ぞくぶつには毒になるのだ。

その後、お調べについて逐次ちくじ、与力からの報告を聞いていると、

洪庵の危惧きぐは次第に現実になりつつある気がした。

取調べで左内は、一橋侯推挙すいきよのため、自分が公家くげを説得したと堂々と認めたという。

左内は罪だと思っていなかった。それは、主君の春嶽侯しゆんがくこうの直命だつたからだ。

武士が主命に従うのは当たり前である、と述べ、自分の行動は公明正大こうめいせいだい、天地神明てんちしんめいに誓って恥じるものはない、と断言した。

取り調べた幕吏まくりですら、左内の行動に問題はない、という結論を出さざるを得なかった。

そもそも捕縛されたことすら左内には意外だった。だから処罰しよばつも軽微けいびだろうと高をくくっていた節ふしがある。実際、その頃、洪庵が与力から聞いた言葉も、樂觀的なものだった。

「厳しい処罰になるかもしれませんが、それでも遠島えんとうがせいぜいでしよう」

「島流し……」と洪庵は呟いた。

青雲せいうんの志を抱いた青年が、離れ島で朽ち果てるのかと思うと、なんともやるせない。

せめてその時は、読み切れないほどの蘭書を贈ってやろうと考え、

捕縛された弟子に対し、何もできない我が身を慰めた。ななせ

頼みの綱は、評定に当たる五手掛ごてがかりに、旧知の久貝因幡守正典くがいなばのかみまさのりがいることだ。久貝さまなら、厳しい評定はなさらないだろう、と洪庵はさすがの思いで考えた。

だが、次第に雲行きが怪しくなってきた。先行して決まった公卿の処分が、思ったよりはるかに重いものになったのだ。

その年は、秋になっても異様な暑さが続いていた。

与力は、流れ落ちる汗をしきりにぬぐいながら、言う。

「今回の獄ごくに関しては、井伊さまは相当お怒りで、公卿こうしやうに関しても、京の大掃除だと言いい、三条さま、近衛さまこのえら四人よんにんに落飾らくしやくをお命じになられました」

「なんと、事実上の永久追放とは、現職辞任より重いではないか」と洪庵の表情が曇くもった。

もともと井伊大老たいらうはこの際いま、目障りめざわりで不快な者は厳罰げんばつに処して、徹底的に排除してしまおう、と心を決めていた。自分は徳川幕府を第一だいいちに考えている。だから自分に反対する者は不忠者ふちゆうものだ、という論理である。そんな井伊大老にとつて、正論を堂々と主張して憚はばからない左内は、とんでもない無法者むぼうものに思われた。

ある日、橋本左内が「適塾てんまの天馬」と呼ばれていた、という話を聞いた井伊直弼なおすけは膝を打った。

——そうか、あやつだったか。

忘れもしない、井伊が帰藩きはんした際、立ち寄った大坂蔵屋敷かたわの傍らで口論相手の小生意気な書生しよせいが、橋本左内と名乗ったことを思い出したのだ。

この瞬間、橋本左内の命運は風前の灯火ふうぜん ともしびとなった。

翌年の安政六年、再びコレラが日本を襲った。前年より酷い流行ひどだが、医療現場では前年の経験を活かして合理的に対応したため、死者は前年より少なかった。

感染初期に催吐剤さいとやく、鎮静剤はつかんざい、発汗剤の順で投与すれば症状を食い止められ、医師が治療すれば十中六、七は命を助けられた。

だが洪庵のお膝元の適塾も、コレラの暴威ぼういから逃れられなかった。入塾一年の八田道碩が、安政六年七月、コレラで死亡している。洪庵は故郷の遺族に、悔いに溢れる手紙を書き送った。

「コロリ酒ちんせいざん、鎮靖散ひつぱくを用いるも、まもなく一度に嘔吐し痙攣ひんぱん、呼吸逼迫ひつぱくにて昏倒こんとうされ、痙攣は収まるも歇冷、硬直が頻発ひんぱつし、キナ塩キ（キニーネ）、阿芙蓉アヘン、ホフマム液からしでい、芥子泥げんせい、芫青固膏ここう（ツチハンミヨウの薬用成分の湿布）、浣腸かんちよう、アンモニア水に阿芙蓉を加え腹部を湿布し、海塩かいえんを袋に入れ腹背交代に身体を温めるも効なく、ますます悪化し、日暮れに危篤きとくとなりました。麝香じやこう、ホフマムを用いるも、

戌いぬの下一刻げこく（午後八時頃）、養生かなわず他界いされました。ご子息をお救いすることが出来ず、誠に残念です」

洪庵の無念さがひしひしと伝わってくる手紙である。

ここで瞠目どろもくすべきは、実に多様な治療法が駆使くしされていることだ。それは慢心まんしんすることなく、治療に専心せんしんした洪庵の精進たまものの賜物だった。大坂でコロリの嵐が吹き荒れていた頃、洪庵に惜しめない助力をしてくれた、心強い同志、大和屋喜兵衛やまとやきへえが亡くなった。訃報ふほうを聞いた洪庵は、天を仰ぐ。

——洪庵先生の面倒を見るのは、浪速なにわの商人の甲斐性かいしやうでんがな。

汗を拭きながら、派手な柄がらの扇子せんすで太った身体あおを扇ぐ、人の良い笑顔が浮かんでくる。

まだ道半ばなのに、と洪庵は唇を噛む。

それでも、除痘館じょとうかんが官許かんきよになったのを共に喜べたことは、せめてもの救いだっただ。

そんな中、洪庵は、大野藩の伊藤慎蔵しんぞうに預けていた次男・平三へいぞうを呼び戻した。

大野で元服げんぷくを終えた平三の、眩まばゆいばかりの若武者姿に、洪庵は目を細める。

「平三、蘭学を学びたいという気持ちは、今も変わりないか」

静かに問いかけると、平三は戸惑いながらも、大きくうなずく。「もちろんです。私は将来、父上のような立派な蘭医になりたいのです」

「そうか。だがそれでは足らん。私如きは楽々と超えてみせる、というくらいの気概きががなければ、これからの乱世を渡ってはゆけぬぞ」またお説教か、と思った平三は、生返事をして次の言葉を待つ。すると洪庵は言った。

「お前は長崎に行き、蘭医のボンペ殿に直々に西洋医学を学んでこ」

平三は驚いて目を見開いた。洪庵は続けた。

「長崎医学所では選りすぐりの藩医が西洋医学を学んでいる。先日、塾頭の長与専齋ながよせんさいにも、長崎でボンペの教えを受けよと指示した。その時思ったのだ。塾生を我が子のように思うと言いながら、実の子に古くさい学問を続けよというのは欺瞞ぎまんだ。平三には申し訳ないことをした。今こそ蘭医学の最先端の地、長崎へ行って、思う存分学んできなさい」

平三は両手をついて平伏し、「精一杯、修学して参ります」と涙声で言う。

尊敬する父に勘当かんとうされ、死にたいと思ひ詰めたこともある。

だが平三は、雪の険路けんろを越えはるばる訪ねてくれた祖父の億川百

記きや、転学てんがくを認めてくれた大野藩召し抱えの伊藤慎蔵や、彼とつに嫁い  
だお手伝いのお鹿しかの思いやりに救われた。

それは、全てこの日のためだったのだ、と平三は思った。

秋口の始め、適塾の塾頭の長与専齋と連れ立って、緒方平三は長  
崎さいかへ西下した。

洪庵にそれを決意させたのは、またしても泰然からの手紙だった。

「拙者せつしやが麒麟児きりんじと自慢した舜海しゆんかいは、長崎熱にかぶれ駄馬だばになり候そうろう。

豚児良順とんじがそそのかし候ゆえ、親として痛し痒かゆしなり。されどひな  
鳥たちの行く末は自分で決めるべき、老兵は消えるべき頃ころあ合いなり。

拙者は家督を舜海に譲り、隠居いんきよを致す所存しよぜんなり」

泰然は、舜海に去られると自分が順天堂じゆんてんどうの治療や教育を引き受け  
させられるのがわずらわしくて、長崎行きに反対したようだ。とこ  
ろがそれを拒否されると一転して、隠居してしまうとは、いかにも

極端きよくたんなあの方らしい、と洪庵はくすくす笑う。

だが自分の身を振り返ると、笑っていられない、と身に染みた。

泰然の早々の隠居には、洪庵も感じるところがあった。

——自分が先頭に立って頑張り続けるのは、如何いかなものか。私は、  
後に続く若者の邪魔じまになつていないだろうか。

そう思った洪庵は、平三を呼び戻し、長与専齋に同行させ、長崎  
に留学させようと決意したのだった。この時も、洪庵と泰然の、大

きな節目は同期していたのだった。

\*

その凶報きようほうは江戸からの早馬で、洪庵の元に届けられた。

書状を持つ手が震える。手紙は、左内の斬首ざんしゅを告げていた。

どうしてこんなことになってしまったのだ、と洪庵は歯ぎしりする。

「最悪、せいぜい島流しでしょう」と与力は、先日までそう言っていたのに。

安政五年十月、町奉行で取り調べを受け、その後は藩邸内で謹慎した橋本左内は、一年後の安政六年十月二日、最後の糾問きゆうもんを受けた後、小伝馬町牢舎こでんまちちやうしやに入獄にゅうごくを命じられた。

そして十月七日、二十五歳の若さで、刑場の露つゆと消えた。

この時、五手奉行の評定は遠島が妥当とし、他の老中もそのように認めたという。

だが井伊大老が付け札つみいっしやをして罪一等を加え、死罪となってしまうのだという。

激しい怒りを感じつつも、洪庵は違和感を覚えた。かりそめにも幕閣のトップともあろう者が、はるか格下の者に対して、かくも感

情的に拳こぶしを振りかざすだろうか。

その謎を解いてくれたのは、久々に適塾に立ち寄った村田蔵六だ  
った。

長州藩の召し抱えとなったさいづち頭の蔵六は、旅装を解くと洪  
庵の書齋たんざに端座した。

「このたびの左内の悲報、洪庵先生はお嘆きだろうと思い、私が知  
り得たことをお伝えしようと、参上した次第であります」

「やはり左内の厳罰には、隠された理由があったのか」  
洪庵が急き込んで訊ねると、蔵六はうなずいた。

「左内は下手を打ったのです。『大獄』には三つの顔がありました。  
条約締結に逆らう者への見せしめ、將軍嗣子決定に関連する処罰。

そして大老が最も重視したのが、『水戸密勅事件』でした。そんな  
風に次元を異ことにする件と一緒に一刀両断したため、支離滅裂な  
御沙汰ごさたとなってしまうのであります」

窮理きゆうり（物理学）の事象を語るように淡々と話す蔵六に、洪庵は苛  
立ちを感じた。

お前の弟弟子おとうしのことだぞ。  
だが蔵六には、そんな洪庵の不快な気持ちはわからない。

洪庵は、怒気どきを含んだ声で言う。

「左内がやったことは結局、失敗した一橋侯の擁立ようりつにすぎないだろ



う」

「おっしゃる通りですが、左内は大老の虎の尾を踏んでしまったのであります。井伊大老は徳川慶福侯の將軍就位と日米修好通商条約締結を一気に強行し、返す刃で目障りな三諸侯を『隠居慎み』に処し、一橋慶喜侯の登城も禁じました。これにより春嶽侯は隠居させられ、福井藩の城下では、藩士たちの不満が渦巻いておりました。そこで湧き上がったのが、三卿が同盟を組んだ謀反の計画でした。左内はその計画の中心人物だったのであります」

「なんと畏れ多いことを……」

そう言ったきり洪庵は言葉も出ない。

だが左内の真つ直ぐな性質と、彼の神算鬼謀を思えば、納得できる話だった。

蔵六は、驚愕の真相を、淡々と語り続ける。

「現実主義の左内は、謀反が成功する可能性は低いとわかっていたはずです。しかしながら、暴発組を犬死にさせたくないという一心で、やむなく首謀者になったようであります。ところが藩兵を率い東征を目論んだ、要の島津斉彬侯が急死したため、計画は頓挫します。もはや暴発を抑えられないとみた左内は、練り直した計画を仲間に打ち明けたのであります。謹慎中の春嶽侯を上洛させ、越前薩摩、土佐、長州で連合を組み、春嶽侯を福井に迎えて挙兵し、

京都に向かう途上で井伊大老の彦根城と間部老中の鯖江城を屠り、赤鬼、青鬼の根城を奪いつつ入京後、京都を鎮護し諸侯に檄を飛ばし天皇に遷座を乞う。念のため春嶽侯の夫人は実家の肥後熊本細川藩に戻して保護してもらうという、実に壮大な計画だったのであります」

洪庵は腕組みをして、目を閉じた。絵図を指し示しつつ、弁舌爽やかに計画を説明する左内を、同志たちが食い入るように見つめている場面が目に見えようだ。

蔵六は続けた。

「しかし、左内の計画は藩の上層部に漏れ、幕府に密告されたのであります。彼らにすれば、主君の身を守るという大義名分がある上、日頃から目障りだった左内を排除できるという、一石二鳥の行爲だったのであります」

これで井伊大老が左内を厳罰に処した理由が理解できた。幕府転覆の計画を画策した中心人物ならば、死罪になって当然だ。

だが井伊大老はその事実を公言することはできない。それが広く知られたら追隨者が現れ、本当に幕府が転覆させられてしまうかもしれないからだ。ならばその者の口を封じるよりない。

納得した洪庵は、氣力を絞り出すようにして言う。

「左内の名誉回復のため、何かできることはないだろうか」

「残念ながら何ありませんな。死んでしまった者は、何をしても生き返らないのであります」

そんなことはお前に言われなくてもわかっておる、と洪庵は声を荒らげそうになる。

しかし蔵六に、洪庵の苛立ちは伝わらない。蔵六は、遠い目をした。

「十月二日、入獄した左内は、『獄制論』なる文章を獄中で認めたそうです。私は偶然、それを入手しました。先生にご覧になっていたいただきたいと思い、急ぎ参上したのであります」

洪庵は小冊子を手にとった。

懐かしい左内の字を見て、涙をこらえながら、文を読む。

『本来ならば勸善懲惡かんぜんちやうあくの場であるべき獄は現在では、惡の上に惡を加える場所となってしまうている。囚人は悔い改めようとしな。入獄で接するのは惡党で、惡さの方法のみ語り合う。出獄しても金がないので、惡さを繰り返す。適宜てきぎ、囚人に応分の仕事をさづけ、勤勉な者は広い室に、怠惰たいだな者は狭い室に入れ、教師を選び人倫じんりんを論し、出獄時には作業代を与えれば、本當の惡を懲らしめ、その根を断つことができるようになるであろう』

「なんと斬新ざんしんな。左内の創意工夫は時と場所を選ばなかったのだな」

江戸時代の奉行は警察官、検察官を兼ねた裁判官で、弁護人制度

もない中では、お上かみが怪けしからんと思えば、極刑も意のままにできた。

そこに一石を投じ、一矢報いようという左内の思いがひしひしと伝わってくる。

——まことに左内は、獄中でも左内のままであったのだな。

紙を裏返すと、そこに七言絶句しちごんぜつくが綴つづられていた。

二十六年夢ノ如ク過グ こへり 顧ミテ思ウ平昔ノ感滋多シ  
てんじょう たいせつかつ しんせつ  
天祥ノ大節嘗テ心折ス どしつなおきん せいき  
土室猶吟ズ正氣ノ歌

蔵六の抑揚のない言葉が、夕闇に包まれた部屋に響く。

「左内は日本のため、立派に務めを果たしたのであります。その頃、日米修好通商条約の締結という難事に対し、全権委員として孤軍奮闘し、苦境にあつた岩瀬忠震殿は、左内に頻繁ひんぱんに手紙で助言を求め、それに対しの確な意見を与えたようであります。岩瀬殿の外交の発想は、左内の構想とよく似ているのであります」

ぶつきらばうな蔵六の静かな声が、洪庵の胸を突く。

「左内は自分の経緯を実現したのだな」と呟いた洪庵は、ほっとした。

「藩邸に幽閉された左内は、書を読み、詩を吟じ、左内の傍らには、

一輪の野菊のように可憐な女性が寄り添っていたとも聞いており  
す」

非業ひごうの死を遂げた国士の最後に相応ふさわしい、と洪庵は安堵あんどする。と  
ころが、そんな洪庵の気持ちを逆撫さかでするかのように、蔵六は口を  
開く。

「それにしても井伊大老は、実に用意周到に『大獄』を遂行したも  
のであります。事前に、事件を裁く江戸の評定所内の『五手掛』の  
寺社奉行・町奉行・勘定奉行の三奉行、大目付、目付の合計五名を、  
全て自分の意のままになる者に入れ替えたのです。そんな万全な備  
えで臨のぞんだにもかかわらず、左内に対する五手掛の判決は、遠島と  
いう妥当なものでありました。まあ、それでも不当に重いのであり  
ますが。ところが井伊大老は付け札をして、罪を一等重くするとい  
う異例の対応をして、開国派で一橋派の重要人物たちに死罪を申し  
渡したのです。そんな死地に飛び込んだ左内はまさしく、飛んで火  
に入る夏の虫だったのであります」

淡々と判決を分析する蔵六の冷徹な言葉に、洪庵は苛立ちを抑え  
きれない。

だが師の憤怒ふんぬを察する様子もなく、蔵六は続けた。

「福井藩の藩士による誹謗は、井伊大老の判決よりも酷いものでし  
た。左内は公家へ取り持ち料の銀五十貫を贈ったのが露見ろけんし、贈賄罪ぞうわい

で捕らえられた不忠不義の臣だという評判は、守旧派の悪質な誹謗であります。安政の大獄の時、すでに処分されていた水戸斉昭侯や一橋慶喜殿は重ねて処分されましたが、春嶽侯には重ねての譴責けんせきはなく、越前藩では左内だけが処分されました。その事実こそが、藩内の反左内派の暗躍あんやくが功を奏した証拠なのであります」

洪庵はやりきれない気持ちになる。

「そのことは左内にとっては、本望ほんもうだったようであります。左内にとつては、主君である春嶽侯が左内の忠義を信じて疑わず、処罰後も左内に対する信頼が揺るがなかったことが救いでありました。お二人の間には、主従を越えた深い親交があり、獄中の左内と春嶽侯は、六言絶句ろくごんぜつくとも言うべき、奇妙な形式の短い私信のやりとりがあったとか」

「六言絶句とは聞いたことがないな」

「古来の漢詩にも見ない形式でありますから。でもその破格のやりとりこそ、お二人の心情を表しているかと。春嶽侯は潔白けつぱくを信じ、左内に白鷺はくしよを贈られるなど、意を砕くだかれたようです」

「そうか。春嶽侯に一身を捧げた左内は、むしろ満足だったのかもしれないのだな」

「それと、洪庵先生が左内を信じて疑わなかったことも、心の支えになったでしょうな」

「その程度で、左内の気持ちが慰められたのであれば、幸いだよ」  
洪庵の脳裏に、最後に会った時、別れも告げずに立ち去った左内  
が、残した詩の一節が蘇る。

——生キテハ名臣めいしんトナリ 死シテハ列星れつせいト為なラン

「左内は斬首の前に、大泣きしたという話があります。見苦しい、  
と痛罵つうばする連中もおりますが、それは居合わせた役人どもからの伝  
聞で、本当はどうだったかはわかりません。いずれにしても左内が  
涙を流したかどうかは、後の人々の意によってもどうにもされてしま  
うものであります。私は、そのことは、さして重要だとは思わない  
のであります」

洪庵は適塾で、「泣き虫左内」と呼ばれていた、若き日の左内の姿  
を思い浮かべる。

確かに左内はよく泣いた。だが振り返れば、それはどうにもなら  
ない現状に対し、痛憤つうふんした涙であることが多かった。自分が死に処  
せられることを悲しんで泣いたとは思えない。

成すべき事を成し、連座れんざする者も出さず、主君・春嶽侯を守り切  
つての死はむしろ本懐ほんかいで、従容しじようとして笑顔で死に赴おもむく方が左内ら  
しい、とも洪庵には思われた。だがあるいは、死ぬ間際、左内は自

分が背負わされた重荷から解放されて、本当に幼い頃の「泣き虫左内」に戻れたのかもしれないとも思う。すると、少し救われた気もする。

「しかし左内ほどの者が、福井藩の内情を把握しきれず、処刑されたのは残念であります」

蔵六の言葉はどこまでも論理的、かつ冷静だった。そしてそのことで、洪庵は苛立ち続けた。

この男には、人情の機微きびというものがまったく感じられない。けれどもそのことを洪庵は、重々承知していたはずだった。

それでも抑えきれない気持ち溢れ出てくる。

蔵六は珍しく、好物の湯豆腐に手を付けようとしなかった。

二人の師弟は黙然もくぜんと座っていた。

夕陽の光が、書齋しうさいの障子しじをほの赤く染めていた。

\*

「安政の大獄」を完遂かんすいした井伊大老は、比類無き権勢を手にしたが、諸方面しよへんから怨嗟えんさを集めた。

特に戊午の勅ともしなに伴い、徹底的に痛めつけられた水戸藩の恨みは深かった。



安政七年（一八六〇）三月三日は総登城日で、大名行列が江戸城に入る。

幕府にとって晴れがましくも神聖なその日、十八名の水戸浪士が桜田門さくらだもんに集った。

桜田門には、前夜からの季節外れの大雪が降り積もっていた。護衛に守られ駕籠で登城しようとした大老・井伊直弼は、桜田十八烈士と賞賛される水戸藩浪士の狂刃きやうじんにかかり絶命する。

井伊直弼は、嫌い抜いた水戸一派を厳しく弾圧した結果、返り討ちにあった。

後に考えると、幼いながら徳川慶福を継嗣に選んだことは、一橋慶喜の人となりを思えば間違いだっただとはいえない。そして主命で左内が推戴すいたいのため奔走ほんそうした慶喜は、結果的に徳川幕府の命脈を断ち切った。

左内は、慶喜の才は認めつつ、その人柄は認めていなかった。

そんな人物を、主命によって奉じざるを得なかったところが、左内の最大の悲劇だった。

独裁的に強権政治を断行した大老・井伊直弼の、後世の評判はきわめて悪い。

だがそんな中でも、大老を高く評価する者もいた。長崎にいた松

本良順である。

安政六年三月、海軍伝習所の閉鎖が突如決まり、伝習生は江戸に帰ることになった。それは横浜、箱館はこだて、長崎の開港直後で、伝習生は即戦力と目されたための拙速な判断だった。

この時ポンペは無報酬で構わないので、医学伝習と医療対応を長崎で続けたいと申し出た。

感激した良順は長崎奉行・岡部駿河守おかべするがのみにその由よしを願ねがい出た。

これに対し井伊大老は、意外にも黙許もくきょを与えたのである。

医学伝習所は幕府の正式な組織ではないので、どうしようと幕命に逆らうことにならないという理屈だ。井伊直弼暗殺の数日前のことだ。

良順はその機とらを捉え、旗本はたもとに限られていた従来の修学条件てつがひを撤廃し、誰でも蘭医学を学べるようにして、新たに生徒を募集したのである。

各藩に通達を出すと、最初に応じたのは福井藩だった。

笠原良策りょうさくの同僚なからいの半井仲庵ちゆうあんの推輓すいばんで岩佐純いわさじゆん、橋本左内の弟・綱常つねなど七、八名が派遣された。

佐賀鍋島藩なべしまはんからは相良知安さがらともやす、他にも黒田、毛利、松浦、熊本くまもとの諸藩から応募があった。

順天堂からは佐藤舜海たかなかこと尚中しやうちゆうが率らいる、佐々木東洋ささきとうよう、関寛齋せきかんさい、

益田宗三ますだなどの面々が同行した。

適塾からは塾頭の長与専齋と、洪庵の次男の平三が参加した。

こうして明治の近代医学の土台となる人物が、長崎りくせきに陸続りくぞくと集まってきた。

この一事を以て良順りょうじゆんは終生、井伊大老を褒め讃えた。

振り返れば、将軍家定いんぎさだが危篤いんきつになった際、蘭医の登城を決断したのも直弼ちくへきだった。悪名高い井伊直弼だが、医に関しては先取的で柔軟な考えの持ち主だったのかもしれない。

井伊大老が暗殺された数日後、験げんの悪い安政は改元され、万延元まんえん年となった。

その年の秋、浪速では、手狭てせまになった除痘館の移転申請が認められ、適塾のひとつ南の通り、尼崎あまがさき一丁目へ移った。そこは適塾より、一回りも大きい家だった。

その半年前の二月、恩師の子で長崎留学に同行した中耕助なかこうすけが亡くなり、五月に耕助の叔父で二代目中環なかつたまき・伊三郎いさぶろうが後を追った。思えば洪庵が十七歳の時、大坂で天游てんゆうに弟子入りして以後ずっと、二人とは親兄弟のようなつきあいが続いていた。三十五年もの間、一緒だった人物を次々に失った洪庵の悲しみは深かった。

洪庵が、除痘館の覚え書きを詳細に記すようになったのは、この

頃からである。

その頃、江戸では八月十五日の中秋の名月の夜、水戸で蟄居ちつきよしていた前藩主、徳川斉昭が突然死した。死因は心筋梗塞しんきんこうそくではないか、と推測されている。

これに伴い幕府は斉昭の永蟄居えいちつきよを解き、烈侯れつこうと諡おくりなした。更に十月、安政の大獄が勃発するきっかけとなった戊午の勅詔へんのうを、朝廷に返還するのではなく、都合が付き次第、幕府に返納せよ、と通達した。これは、都合がつかなければずっと持っていていいという、事實上、勅詔の返還を無期延期した通達だった。

幕府はこれで水戸藩は沈静化するだろうと樂觀視していた。だがそれはとんでもない思い違いだった。

この名譽回復と勅詔返却の無沙汰は、水戸藩士に、自分たちの主張は正しく、桜田門外の事変は義挙ぎきよだったという認識を与えた。

そのため却って浪士は意気軒昂いきけんこうとなり、水戸藩は幕末の討幕運動とうぼくの急先鋒きゅうせんぽうへとなっていく。

これにより、倒幕の動きは一気に加速していくのである。

(つづく)